

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第203集

八尾市

# 久宝寺遺跡

寝屋川流域下水道中央南増補幹線(一)人孔築造工事外に伴う久宝寺遺跡発掘調査報告書

2010年6月

財団法人 大阪府文化財センター



(財)大阪府文化財センター調査報告書 第203集

八尾市

# 久宝寺遺跡

寝屋川流域下水道中央南増補幹線(一)人孔築造工事外に伴う久宝寺遺跡発掘調査報告書

財団法人 大阪府文化財センター



## 序 文

大和川がもたらした大量の土砂は、現在の河内平野の原形を形作り、弥生時代から始まる開発の大きな要因となりました。今日われわれは洪水を災害と認識していますが、河内平野の名だたる遺跡は、この洪水により形作られた台地の上に成り立っています。エジプトはナイルの賜物という言葉がありますが、このことは河内平野にもあてはまるわけです。そのなかでも久宝寺遺跡は、河内平野だけでなくわが国を代表する遺跡で、これまで弥生時代の大規模水田、古墳時代初頭の準構造船、同じく古墳時代初頭の大墳墓群など、数多くの調査成果が得られています。さらに遺跡の南西部には、聖徳太子と物部守屋が戦ったとされる故地がありますが、そこには飛鳥時代に洪川廃寺が建立されます。また、戦国時代には久宝寺寺内町が築かれるなど、久宝寺遺跡周辺は中河内における中核集落の一つとして機能してきました。

今回の調査においては小面積であるにもかかわらず、縄紋時代以降、中世に至るまでのこの遺跡の変遷に、新たな知見を加えることができました。この調査が地域の歴史像をさらに豊かにしたことは言を待ちません。

最後に調査にあたりましては、地元の方々ならびに関係各位から多大なるご協力、ご援助を頂きましたことを深く感謝いたします。

平成22年6月

財団法人 大阪府文化財センター  
理事長 水野 正好



## 例 言

1. 本書は、大阪府八尾市西久宝寺地内に所在する久宝寺遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、寝屋川流域下水道中央南増補幹線の建設事業に伴うもので、大阪府東部流域下水道事務所の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと、財団法人大阪府文化財センターが実施した。発掘調査期間は平成20年11月4日から平成21年7月6日と、平成22年1月4日から平成22年3月11日である。出土遺物整理期間は平成21年7月7日から平成21年10月31日と、平成22年3月12日から平成22年3月31日で、平成22年6月30日に本書の刊行を以って完了した。
3. 調査体制は、以下の通りである。
  - 寝屋川流域下水道中央南増補幹線（一）人孔築造工事外に伴う久宝寺遺跡発掘調査（その2）平成20・21年度（2008・2009年度）平成20年11月4日～平成22年3月31日、1・2・5・6区  
〔平成20年度（2008年度）〕調査部長 赤木克視、調整課長 田中和弘、中部調査事務所長兼調査係長 寺川史郎、技師 内田真雄  
〔平成21年度（2009年度）〕調査部長兼調査課長 福田英人、調査課調整グループ長 金光正裕、調査課調査グループ長 寺川史郎、中部総括主査 秋山浩三
  - 寝屋川流域下水道中央南増補幹線（一）人孔築造工事外に伴う久宝寺遺跡発掘調査（その3）平成21・22年度（2009・2010年度）平成22年1月4日～平成22年6月30日、3・4区  
〔平成21年度（2009年度）〕調査部長兼調査課長 福田英人、調査課調整グループ長 金光正裕、調査課調査グループ長 寺川史郎、中部総括主査 秋山浩三、副主査 奥村茂輝  
〔平成22年度（2010年度）〕調査部長兼調査課長 福田英人、調査課調整グループ長 江浦洋、調整グループ主幹 岡本茂史、調査課調査グループ長 岡戸哲紀、中部総括主査 秋山浩三、副主査 奥村茂輝
4. 本書で報告する発掘調査のセンターにおける調査番号は、久宝寺遺跡08-1と同09-1である。各調査番号と調査区に対応関係は、第2章第1節に記した。

また久宝寺遺跡08-1における航空測量の委託契約名称は「久宝寺遺跡（下水その2）発掘調査に伴う航空測量」で、同09-1における委託契約名称は「久宝寺遺跡（下水その3）発掘調査に伴う航空測量」である。
5. 遺物写真については、調査課調査グループ主査片山彰一が担当した。
6. 本書の執筆・編集は、奥村がおこなった。
7. 現地での発掘調査では、大阪府東部流域下水道事務所、大阪府教育委員会文化財保護課、八尾市教育委員会のご協力を得るとともに、関係各機関の方々のご指導、ご教示を賜った。
8. 本書収録の写真・遺物などの記録類は、財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

## 凡 例

1. 発掘調査及び整理作業は、当センターの「遺跡調査基本マニュアル【暫定版】」2003. 8に従っておこなった。
2. 発掘調査でおこなった測量は、世界測地系に準拠する平面図直角座標系第Ⅵ系を基準とする。また、本書で記す北は、座標北を示す。
3. 発掘調査で使用した測量の標高は、東京湾平均海面（T.P.）を基準とする。本文中および挿図で示す標高はすべてこれによる。
4. 発掘調査は、調査地を6つの調査区に分けておこなっている。調査区の番号は北東から南西の順で付している。
5. 遺構は、アラビア数字を用いて通し番号で名称を付けており、アラビア数字の後ろに遺構の形態・種類を表す文字を付している。例) 044溝
6. 遺構番号は調査時に付した番号をそのまま用いている。したがって報告書中の本文・遺構挿図・遺構写真中の遺構番号は、調査時に作成した遺構図面、遺物ラベル、写真・遺物・図面台帳に記されている遺構番号と同一である。
7. 遺構の断面図・平面図は、対象により適宜縮尺を変え掲載しており、図ごとにスケールバーと縮尺を表示している。
8. 遺物図版の縮尺は、土器が4分の1、石器が3分の2である。
9. 本文中の挿図に掲載された遺物番号と、写真図版に掲載された遺物番号は同一である。
10. 地層の土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版 標準土色帖』2008年版 農林水産省農林水産会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
11. 遺跡分布図で用いた地図は平成12年国土地理院発行二万五千分の一地図を用いた。



## 本文目次

第1章	調査に至る経緯と経過	1
第2章	調査の方法	2
第1節	発掘調査	2
第2節	整理作業	4
第3章	位置と環境	5
第4章	基本層序	8
第5章	調査成果	14
第1節	古代から中世の遺構面	14
第2節	弥生時代末から古墳時代初頭の遺構面	19
第3節	弥生時代後期の遺構面	23
第4節	弥生時代前期の遺構面	26
第5節	縄紋時代相当の遺構面	26
第6章	まとめ	28

## 挿図目次

第1図	調査地の位置	1
第2図	各調査区的位置図	3
第3図	地区割りの方法	4
第4図	調査地の位置と周辺の遺跡	6
第5図	2区西壁断面図	9
第6図	1区西壁断面図	10
第7図	6-3区平面・断面図	10
第8図	3区西壁・4区東壁断面図	11
第9図	第2面遺構配置図	14
第10図	第3面全体図	15
第11図	1-3区第3面平面図	16
第12図	2-3区第5面平面図	17
第13図	第6面全体図(左)・2区第6面平面図(右)	18
第14図	2-3区第6面平面図	19
第15図	049溝断面図	20
第16図	038・039土坑平面・断面図	20
第17図	第9面全体図(左)・2区第9面平面図	22
第18図	2-3区第9面平面図	23
第19図	2区第13面平面図	24

第20図	包含層出土土器	25
第21図	遺構出土土器	25
第22図	第13～17層出土石器	27
第23図	最終掘削面石器確認地点	27
写真1	作業風景	3
写真2	トラッククレーンによる撮影	3
表1	各断面図の土色(1～4区)	12

## 写真図版目次

### 図版1 遺構

- |                 |                 |
|-----------------|-----------------|
| 1 調査前風景(北から)    | 2 1区第3面全景(南東から) |
| 3 4区第2面全景(北から)  | 4 3区第3面全景(東から)  |
| 5 2区第3面全景(南東から) |                 |

### 図版2 遺構

- |                      |                     |
|----------------------|---------------------|
| 1 2区第3面遺構検出状況(南東から)  | 2 2区第3面遺構完掘状況(南東から) |
| 3 038・039土坑検出状況(東から) | 4 038土土器検出状況(東から)   |
| 5 3区第5・6面全景(東から)     |                     |

### 図版3 遺構

- |                                |                  |
|--------------------------------|------------------|
| 1 2区第6面全景(北から)                 | 2 2区049溝断面(北西から) |
| 3 3区048溝断面(東から)                |                  |
| 4 2区南端第6面(北東から、手前が048溝、奥が049溝) |                  |

### 図版4 遺構

- |                            |                |
|----------------------------|----------------|
| 1 2区南端第8層堆積状況(東から)         | 2 2区南端第9面(東から) |
| 3 第9面056溝(手前)、063溝(奥)(北から) | 4 2区第9面(南西から)  |
| 5 3区第9面全景(南東から)            |                |

### 図版5 遺構

- |                      |                     |
|----------------------|---------------------|
| 1 056溝断面(東から)        | 2 3区第10面検出足跡群(北東から) |
| 3 3区第12面平面・断面(北東から)  | 4 3区第13面平面・断面(南西から) |
| 5 3区第10層から第17層(北東から) | 6 2区第14層の自然河道(南東から) |
| 7 6-3区全景(東から)        | 8 6-3区断面(西から)       |

### 図版6 出土遺物(土器)

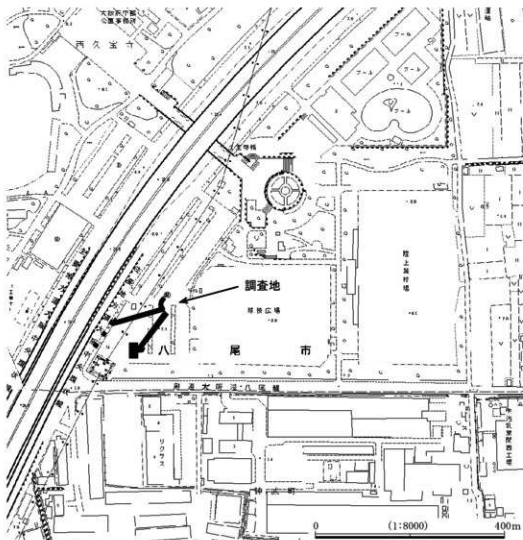
### 図版7 出土遺物(土器)

### 図版8 出土遺物(土器・石器)

## 第1章 調査に至る経緯と経過

久宝寺遺跡は大阪府八尾市の西部に所在する縄文時代から中世の複合遺跡で、南北約1.6km、東西約1.7kmの範囲にわたる。当遺跡での本格的な発掘調査は、1973年の近畿自動車道松原吹田線の建設に伴うものに始まり、以降大阪府教育委員会、当センター、八尾市教育委員会、財団法人八尾市文化財調査研究会により現在に至るまで随時おこなわれている。

本書に記載する久宝寺遺跡の発掘調査は、寝屋川流域下水道中央南増補幹線の建設に伴って実施したもので、調査地は八尾市西久宝寺地内に位置する（第1図）。調査地は以前まで、久宝寺緑地公園の南西の一角であった。同事業に伴う発掘調査は、平成12年5月18日から同年10月31日まで、当センターと大阪府東部流域下水道事務所との間で「寝屋川流域下水道中央南増補幹線（一）（第1工区）下水管渠築造工事に伴う久宝寺遺跡発掘調査」として受託契約を結びおこなわれたものが最初である。この調査成果については当センター既刊の「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書」Ⅷ（センター2007a）に掲載されている。また同書（14～23頁）には、久宝寺遺跡およびその周辺における、既往の調査内容



第1図 調査地の位置

がほぼ網羅されているためご参照いただきたい。

今回の調査にさきだてて当センターでは、大阪府東部流域下水道事務所との間で、平成20年11月4日に、「寝屋川流域下水道中央南増補幹線（一）人孔築造工事外に伴う久宝寺遺跡発掘調査（その2）」として、平成22年1月4日に「寝屋川流域下水道中央南増補幹線（一）人孔築造工事外に伴う久宝寺遺跡発掘調査（その3）」として発掘調査の受託契約を結んだ。

発掘調査は大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと、送泥管部、管廊部、取り付け部、送泥管延長部を平成20年11月4日から平成21年7月6日まで、管理棟部と管理棟南の地盤改良部を平成22年1月4日から3月10日までおこなった。

## 第2章 調査の方法

発掘調査および整理作業においては、当センターの「遺跡調査基本マニュアル【暫定版】2003.8」に従っておこなった。

### 第1節 発掘調査

調査は幹線の送泥管部、管廊部、管理棟部、管理棟南の地盤改良部、取り付け部、送泥管延長部を対象としておこなった。調査区の地区割りについては、送泥管部を1区、管廊部を2区、管理棟部を3区、管理棟南の地盤改良部を4区、取り付け部を5区、送泥管延長部を6-1・2・3区とした（第2図）。以下本報告での調査区についてはこの呼称を用いる。なお例言で述べた、調査番号の久宝寺遺跡08-1は1・2・5・6区を指し、久宝寺遺跡09-1は3・4区を指す。

遺物の取り上げや写真撮影にあたっては、センター共通の地区割りを適用した。地区割りは、国土座標軸（第VI座標系）を基準とし、I～VIの大小6段階の区画を設定したもので、大阪府内全域に共通する地区割りである（第3図）。第I区画は大阪府の南西端 $X = -192,000\text{m}$ ・ $Y = -88,000\text{m}$ を起点に、府域を南北15（A～O）、東西9（0～8）区画に分割したもので、一区画は南北6km、東西8kmとなる。第II区画は第I区画を東西、南北各4分割の、計16区画（1～16）に分けたもので、一区画は縦1.5km、横2.0kmとなる。第III区画は第II区画を東西20（1～20）分割、南北15（A～O）分割する一辺100mの区画である。第IV区画は第III区画をさらに東西、南北ともに10（東西1～10、南北a～j）分割した一辺10mの区画である。なお今回の調査対象地は第II・III区画では、G6-9-7HとG6-9-8Hにまたがる。

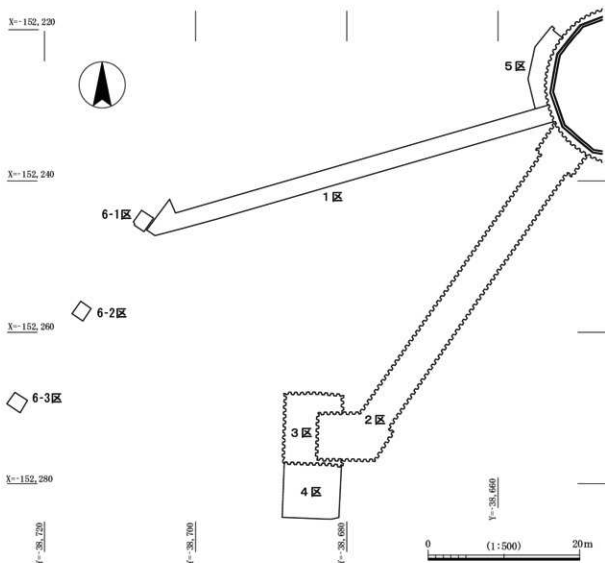
調査地はもともと久宝寺緑地公園の駐車場であったため、調査前はアスファルトが敷かれた状態であった。アスファルトを撤去すると、公園造成時の盛土および、造成前の近現代の水田耕作土を確認した（図版1-1）。

調査にあたっては各調査区において、バックホーを用いて公園造成時の盛土と近現代の水田耕作土層を取り除いた後、人力による掘削・精査をおこない、遺構面および遺構を検出した（写真1）。なお工事における掘削深度との関係上、1区と5区ではT.P.+5.5mまで、2・3区ではT.P.+2.0mまで、4区ではT.P.+5.2mまで6区ではT.P.+5.5mまでを調査深度とした。

なお送泥管の延長部において、NTT敷設管の存在が予測されたため、事前に確認調査をおこなった（6-1・2・3区）。調査の結果、対象地はNTT敷設管の埋設時に攪乱を受けていることがわかった。そ

ここで大阪府教育委員会より、送泥管の延長部は調査不要とする指示を受け、壁面の土層観察図を作成し6-1・2・3区の調査を終了した(第7図)。

調査中は遺構や土層断面の写真撮影および、断面・平面の図化作業を随時おこなった。個別の遺構や



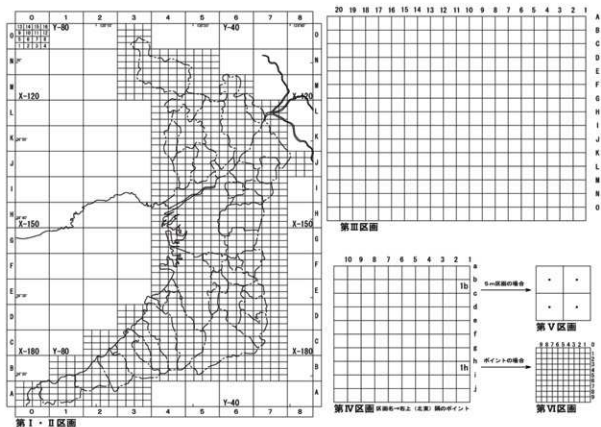
第2図 各調査区の位置図



写真1 作業風景



写真2 トラッククレーンによる撮影



第3図 地区割りの方法

土層の断面図などは、基準線を割り付けて測量・図化をおこなった。

調査時におこなった測量は、世界測地系に準拠する平面図直角座標系第VI系を基準としており、水準については、東京湾平均海面（T.P.）を基準としている。また遺構面の測量には、トラッククレーンによる空中写真測量を送泥管部と2区で3回、3区で2回実施した（写真2）。

## 第2節 整理作業

今回の調査で、プラスチック製遺物整理箱（54cm×35cm×15cm）6箱分におよぶ遺物が出土した。また調査期間中に作成した図面はA2版の方眼紙35枚にわたる。これらの遺物・遺構図面および調査中に撮影した写真について、平成21年7月7日から同年10月30日までと、平成22年3月11日から同年3月31日までの両期間中に、中部調査事務所にて整理作業をおこなった。当該期間中に、報告書用の遺構図面版下と出土遺物図面版下および、報告書の編集作業を経て、平成22年6月30日に本報告書を刊行した。

### 第3章 位置と環境

久宝寺遺跡は八尾市を中心として、大阪市、東大阪市の3市にまたがる遺跡である。北は東大阪市大蓮南・大蓮東、南は八尾市竜華町、西は大阪市平野区加美東、東は八尾市洪川町と広範囲にわたり、遺跡内の西部には久宝寺寺内町が所在する。

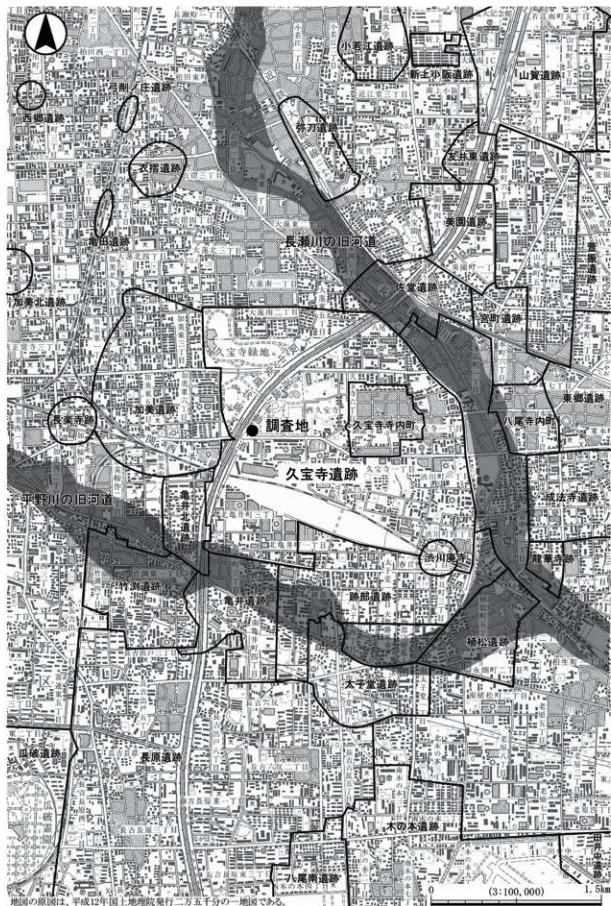
遺跡は大和川の旧河道である、長瀬川と平野川の両河川に挟まれた低位段丘上に立地する。大和川は生駒山系から大阪平野に流れ込んだ後、八尾市志紀あたりで二つの流路に分岐する。このうち西側の分流路が長瀬川である。東側の分流路である玉串川が北上するのに対し、長瀬川は北西に流れる。この長瀬川は周辺での発掘調査により、弥生時代以降の河内平野における主要河川であったことがわかっている。一方、久宝寺遺跡の西南を流れる平野川は、長瀬川から八尾市植松付近で分流したもので、北西方向に流れ、上町台地の東南部に向かう。ただし平野川の形成は弥生時代までは遡らず、古墳時代中期以降であることがこれまでに指摘されている（阪田1997）。このことは、当センターの近年の調査成果でも考古学的に実証されている（センター2007b）。また地理学的にみると、平野川は長瀬川の分流路であるため、形成当初の段階は本流の長瀬川よりも規模は小さかったという。したがって久宝寺遺跡は、古墳時代中期以前に時期を限定するなら、長瀬川と平野川により形成された段丘上に立地していたのではなく、長瀬川の後背湿地上に立地していたという表現のほうがふさわしい。なお現在の和川の流域は、18世紀初頭の付け替え工事によるもので、付け替え以前は上記のような様相であった。

久宝寺遺跡の周囲には亀井遺跡、西には加美遺跡・亀井北遺跡、北には佐堂遺跡・美園遺跡などがあつる。これらの遺跡は上述した長瀬川の後背湿地上に位置している。一方、久宝寺遺跡の東側に位置する成法寺遺跡、矢作遺跡などは長瀬川と玉串川により形成された自然堤防上に営まれた遺跡である。したがって久宝寺遺跡の西と東、すなわち長瀬川の西岸と東岸とでは、遺跡の様相も異なる。

長瀬川西岸の遺跡について時代ごとに概観してみると、亀井遺跡では弥生時代後期の周溝墓が検出され、同時期の中国産銭貨である貨泉、銅鐸片などが出土している。また跡部遺跡でも埋納土坑から銅鐸が出土している。これら以外にも加美遺跡、亀井北遺跡（加美南遺跡）でも弥生時代後期の集落遺構が検出されている。久宝寺遺跡では、竜華操作場跡地およびその南側の調査で、弥生時代前期の土坑や溝群、弥生時代後期の住居址、水田跡が検出されている。

弥生時代末から古墳時代前期にかけては亀井遺跡、亀井北遺跡、久宝寺遺跡など長瀬川西岸の広範囲で、周溝墓や集落跡が検出されている。これは弥生時代後期に、長瀬川西岸にもたらされた土砂が自然堤防を形成した結果、自然堤防のさらに西側が後背湿地と化し、居住域に適した土地環境へと変遷したためである。とくに久宝寺遺跡の竜華操作場跡地およびその南側の調査では、2基の前方後方墳と50基以上にのぼる周溝墓が検出されており、特筆すべき成果といえる。

古墳時代中期以降になると、久宝寺遺跡周辺では集落や墓域の確認例が少なくなる。たしかに久宝寺遺跡や亀井遺跡でも、韓式系土器や陶質土器の出土例はみられるが、遺構や遺物が散在するのみで、当地周辺にこの時期の中核集落が営まれたとは考えにくい。一方、久宝寺遺跡や亀井遺跡の西南に立地する長原遺跡では、韓半島からの渡来系遺物が数多く出土し、また渡来系集団の集落跡の検出例も増加する。久宝寺遺跡周辺の前段階までの集団の移動先は不明であるが、少なくとも古墳時代中期にいたって、周辺における中核的集落が長原遺跡に移ったことはあきらかである。このことは前述した平野川の形成



第4図 調査地の位置と周辺の遺跡



時期とも深く関わる。平野川が人工的な開削により成立したか否かについての議論（阪田1997）は別に  
して、古墳時代中期に成立した同河川が、その真南に位置する長原遺跡の成立要因となったことは確か  
である。

飛鳥時代から奈良時代になると遺跡の立地は、上記の古墳時代中期に成立した長瀬川・平野川にほど  
近い交通の要衝に位置するものが多い。たとえば久宝寺遺跡の西南端部に接する沢川廃寺は、長瀬川と  
平野川に分岐点の西に位置し、さらに対岸には龍華寺跡が位置する（ただし龍華寺跡の比定地につい  
ては異論もある）。長瀬川の東岸に位置する新上小阪遺跡では奈良時代から平安時代に至るまでの建物が  
検出され、円面硯・緑釉陶器・埴・軒瓦等が出土していることから、遺跡内に小規模な仏教施設があ  
ったことが推定されている（センター2003b）。また新上小阪遺跡の北には、七世紀の軒瓦が出土した  
東郷廃寺、西郡廃寺が位置する。もちろん、この時期の遺跡の立地を要因付けたのは河川だけではない。  
『日本書紀』推古二十一年条に記される「大道」は、後に丹比道と呼ばれる官道の前身と考えられ、足  
利健亮氏による現地比定がされているが（足利1970）、その沿道部に七世紀の大型建物群が展開した瓜破  
遺跡や、瓜破北遺跡、喜連東遺跡などが立地する。

平安時代から中世に入ると、平野川の流域は縮小し、かつ北へ移動したようである。たとえば植松遺  
跡は、奈良時代末までまで平野川の流路の中心部だったと考えられるが、遺跡の南半部で平安時代初頭  
以降の建物群が検出されている（センター2007b）。平野川流域における微高地の拡大化は、亀井遺跡  
でも確認することができ、平安時代以降の遺構や遺物の検出数は、飛鳥・奈良時代のそれよりも際立っ  
て多くなる。また長瀬川流域でも微高地の拡大化がみられ、たとえば東岸の小阪合遺跡では、奈良時代  
までの遺構は僅少であるのに対し、平安時代から中世にかけての遺構や遺物は極端に増加している。

以上のように久宝寺遺跡周辺における遺跡の消長を、自然地理条件とあわせて既視したとき、以下の  
ような二点の特徴を指摘することができる。まず一点目は、弥生時代から奈良時代までの間においては、  
長瀬川西側の後背湿地上に位置する遺跡群と、長瀬川と玉串川に挟まれた自然堤防上の遺跡群とでは、  
集落および生産域の消長・変遷が異なるということである。また平野川が古墳時代中期において長瀬川  
から分流したことも、同時期以降の遺跡の消長に大きくかわる要因となった。二点目は平安時代初等  
以降、各河川の流域で微高地が拡大化したことにより、集落・生産域が広域化していった様相が、中河  
内のほぼ全域で確認できることである。

今回の久宝寺遺跡08-1・09-1調査区は、遺跡の中央東端部にあたる。今回調査地の西隣でおこな  
われた近畿自動車道建設に伴う発掘調査では、縄紋時代から中世以降にかけての遺構・遺物が確認され  
た。なかでも弥生時代後期の3基の方形周溝墓は、遺跡の西に位置する加美遺跡における方形周溝墓群  
とともに、当地付近が弥生時代後期の墓域として利用されていたことを裏付ける。さらに調査区の南方  
にあたる竜草地区では、古墳時代前期の前方後方墳（2基）や方形墳（40基以上）が複数検出されている。

以上のように長瀬川西岸にあたる調査地の周辺では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構・  
遺物が顕著で、今回の調査地も同様の遺構・遺物の出土が見込まれる場所である。

## 第4章 基本層序

第2章で述べたとおり、バックホーを用いて公園造成時の盛土と近現代の水田耕作土を掘削した後、人力掘削をおこなった。以下の地層は、近現代の水田耕作土より下層で確認したものである（第5～8図）。

**第1層** すべての調査区で確認できた地層。灰黄色の細砂で構成され、ほぼ全域でマンガン斑の沈着がみられる。第1層は概ねT.P.+6.0m前後の高さで確認できるが、地層のももとの上部は、近現代の水田耕作土により削平を受けている。なお1区の中央と西端では、30cmほどの段差をもって高くなっているが、これはこの部分に水田畦畔があったためだろう。出土遺物は無いが、直下の第2層の時期から、中世後期以降の耕作土と考えられる。

**第2層** 1区の全域と、2区北半部、3・4区、6-3区で確認した地層。2区南半部では、第2層は第1層により搅拌されていたため、確認できなかった。灰色もしくは灰オリブ色の細砂で、4区の落込みでは3層に分かれる。4区でみられる下部の2層は、直下の第8層を搅拌しているため粗砂を多く含む。第2層の出土遺物は、8世紀から16世紀頃までの遺物を含むことから、中世末の耕作土と考えられる。

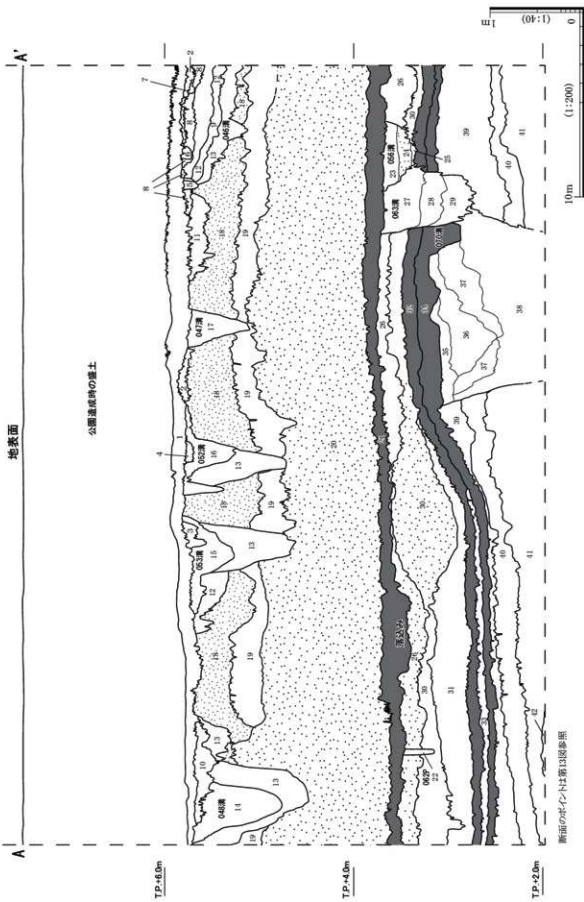
以下の第3～6層は、1区北側で検出した水路、048溝で確認された地層である。なお前述した調査深度の関係上、4区では第3層以下の調査はおこなっていない。

**第3層** 1区、2区の北端と052・053溝内、2・3区の048溝内、6-3区で確認した。それ以外の箇所では第1・2層に削平されたと考えられる。褐色ないしは黄褐色の細砂、もしくは極細砂で構成される地層。出土遺物が無いため、時期は不明である。

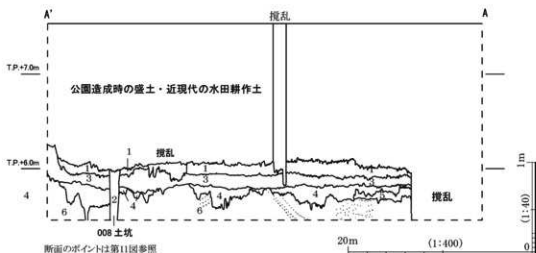
**第4層** 1区、2区の北端、2・3区の048溝内、6-3区で確認した。上部は暗褐色の細砂もしくは極細砂で構成され、下部は暗褐色のシルトで構成される。下層を搅拌するような状況は認められず、落込み内の自然堆積層と考えられる。ただし1区で確認した第4層は、下層である第6層を搅拌した痕跡が認められることから、調査地の西側と東側では土地利用に差があったのかもしれない。第4層からは奈良時代の須恵器片が出土している。なお6-1・6-2区については、第1層から第4層の存在が想定できる深度まで掘削したが、NTTケーブルの敷設に伴って当該層は攪乱されていた。なお6-3区では、部分的に第1層から第4層までの残存を確認することができた（第8図、図版5-7・8）。

**第5層** 1区、2区の北端、2・3区の048溝内で確認した。灰色のシルトで構成される地層。第5層は下層を搅拌している状況が確認できる。いずれも溝の肩部にみられる堆積であることから、本来は溝脇の堤と一体となった地層と考えられ、第1～3層の形成時に削平されたと考えられる。溝048に堆積した第5層から、古式土師器（3世紀頃）が出土しているが、これは第6層中の遺物が、第5層形成時の搅拌を受けたため層中に混入したものと考えられる。したがってこの土器が、第5層の堆積時期を直接示すものではない。

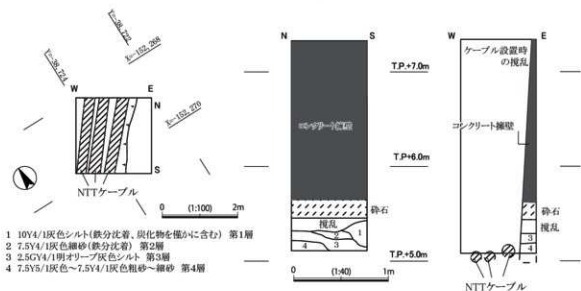
**第6層** 2区の046・047・052・053溝、2・3区の048溝内で確認した。1区ではこれに対応する地層は無い。暗灰色のシルトないしは極細砂で構成され、白色の粗砂を多く含む地層。白色の粗砂は直下の第7層に由来すると考えられ、第7層が高く堆積している箇所では、題6層内の粗砂混入度合いは高い。このことから、第6層形成時に一定規模の搅拌行為がおこなわれたことがわかる。層中からは、弥生時代末か



第5図 2区西壁断面図



第6図 1区西壁断面図



第7図 6-3区平面・断面図

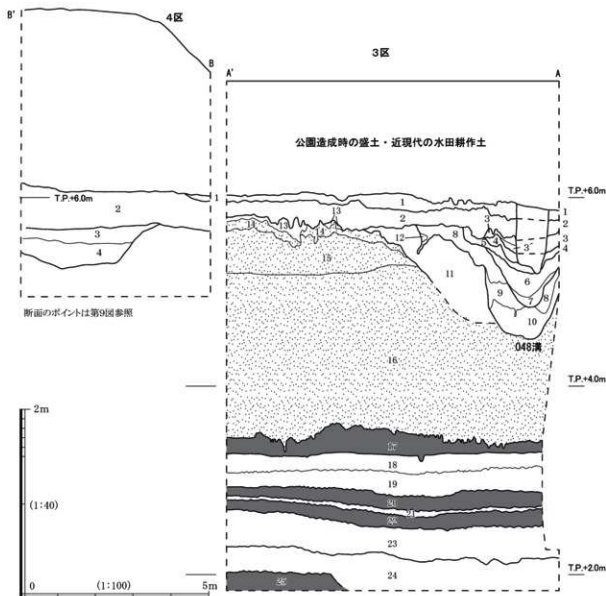
ら古墳時代初頭の土器が出土している。

以上のように第3層から第6層は、各調査区の落込み、もしくは溝内で確認されている地層である。これらの地層は本来、堤や畦畔の上部もしくは内部に堆積していたと考えられるが、第1・2層形成時に削平されたようである。

以下の第7～17層は2区と3区で確認した地層である。

**第7層** 第7層は第7-1層と第7-2層の2層に分かれる。第7-1層は淡黄色の粗砂で構成される地層で、2区のはほぼ全域で確認できたが、3区では確認できない。第7-2層は淡黄色のシルトもしくは極細砂で構成される地層で、2区の全域と3区の北側で確認できる。どちらの地層も洪水によりもたらされたものである。なお3区の北端では下層の第8層との区別ができなかった。第7-1・2層と第8層は、短時間のうちにもたらされた洪水の単位差と考えられる。出土遺物は無い。

**第8層** 2区と3区の全域で、T.P.+3.5m～5.7mにわたり、2m以上の堆積が認められる(図版4-1)。灰白色の粗砂で構成される地層で、洪水によりもたらされたものである。この洪水砂は今回の調



第8図 3区西壁・4区東壁断面図

査区だけに限らず、これまで当センターが久宝寺遺跡において実施したすべての調査で確認されている。例えば遺跡東南端の調査（01-3調査）でもT.P.+4.0m～6.5mにわたり、竜華地区の調査（01-1・2、02-1調査）でもT.P.+4.8m～6.5mにわたって堆積している（センター2007a）。このように久宝寺遺跡周辺では、広域にわたって同時期の洪水砂が確認できる。すなわち弥生時代後期から終末の段階において、長瀬川は第4図に示した流域よりも、西側を流れていたと考えられる。そしてこの時期にもたらされた洪水砂が長瀬川の西岸に自然堤防を形成し、河道が東へ移った結果、現在確認できる流域が成立したといえよう。この洪水砂の堆積により、弥生時代終末以降の当遺跡周辺における地形的条件が形成されたといえる。第8層からは、弥生時代後期の土器が複数点出土していることから、第7・8層ともに当該期の洪水砂と考えられる。

**第9層** 暗灰色の細砂で構成される地層で古土壌。2区の南側では、地層の下部に粗砂が混じる。これは第9層が下層の第10層を攪拌しているためで、2区の南側の第10層は主として粗砂で構成されているからである。3区ではこの地層から、弥生時代前期の土器の底部片が出土しており、第9層の堆積時期が、

表1 各断面図の土色(1~4区)

1区						
番号	土層	大別	細別	備考		
1	10BG4/1 暗青灰色細砂(礫混)	1層				
2		1層		008 土坑		
3	25GY4/1 暗オリーブ灰色シルト	2層				
4	10Y4/1 灰色細砂	4層				
5	75YS/2 灰オリーブ色極細砂	5層				
6	25YS/1 オリーブ灰色シルト(礫混、場所により中～細砂混)	6層				
2区						
番号	土層	大別	細別	備考		
1	10YR5/2 灰色・75YS/2 灰オリーブ色細砂	1層				
2	10Y4/1 灰色～75YS/1 灰色細砂(小礫混)	2層				
3	10Y4/1 灰色細砂(小礫混)	3層		南北溝群		
4	75Y4/1 灰色極細砂					
5	75YS/1 灰色～75YS/2 灰オリーブ色細砂(小礫混)					
6	25YS/4 黄褐色シルト(礫混)					
7	10YS/1 灰色シルト(礫混)					
8	5Y4/2 灰オリーブ色シルト					
9	25Y4/2 暗灰黄色シルト					
10	10GY5/1 緑灰色シルト	4層		043 溝		
11	25Y4/2 暗灰黄色シルト(下部に25Y4/1 黄灰砂質シルト混)			045 溝		
12	5Y4/1 灰色極細砂	5層				
13	10Y6/1 灰色細砂(25YS/6 黄褐色細砂混)	6層		046 溝		
14	10YS/1 灰色シルト			048 溝		
15	10GY2/1 黒色シルト(小礫混)			053 溝		
16	10Y6/1 オリーブ黒色シルト(φ1cm以下の白色礫混)			052 溝		
17	5Y4/1 灰色極細砂			047 溝		
18	10YS/1 灰色シルト		7層	7-1層		
19	10Y4/1 灰色シルト(礫砂混)	8層	7-2層			
20	10Y8/1 灰白色～10Y7/1 灰白色粗砂(下部に微砂～シルト混)	9層		062 ビット		
21	N4/0 灰色シルト(上部に砂質シルト混)					
22	10Y3/1 オリーブ黒色極細砂					
23	25GY5/1 オリーブ灰色シルト(N4/0 灰色～N3/0 暗灰色シルトブロック多く混)					
24	5Y5/2 灰オリーブ色～5Y6/1 灰色細砂～粗砂					
25	75Y3/1 オリーブ黒色シルト(鉄分沈着)					
26	5G5/1 緑灰色シルト(10BG5/1 暗青灰色極細砂混)					
27	5G5/1 緑灰色とN4/0 灰色のシルト	10-1層		063 溝		
28	10Y6/1 灰色細砂					
29	75Y2/1 黒色シルト	10層				
30	25GY5/1 オリーブ灰色極細砂(5GY3/1 暗オリーブ灰色・25Y4/3 オリーブ褐色細砂混)					
31	3Y3/1 黒土(75Y4/1 灰色粘土ブロック混)					
32	10Y2/1 黒色シルト(上部に炭化物汚染、植物遺体あり)	11層				
33	10Y4/1 灰色シルト(10Y2/1 黒色シルトブロック混)	12層				
34	75Y2/1 黒色シルト(10Y4/1 灰色シルトブロック混)	13層		070 溝		
35	10Y4/1 灰色極細砂(小礫混)	14層				
36	10YS/2 オリーブ灰色細砂					
37	75YS/1 灰色～75YS/2 灰オリーブ色細砂(75YS/1 灰色シルト混)					
38	75Y4/2 灰オリーブ色シルト(75Y4/1 灰色シルト混)					
39	75YS/2 灰オリーブ色シルト(植物遺体混)					
40	25GY4/1 暗オリーブ灰色シルト		15層			
41	75Y4/2 灰オリーブ色シルト(細～微砂とシルトの互層、ラミナあり)		16層			
42	10Y3/1 オリーブ黒色シルト		17層			
3区						
番号	土層	大別	細別	備考		
1	25Y6/2 灰黄色細砂(マンガン混)	1層				
2	5Y6/2 灰オリーブ色粗砂(白色小礫混)	2層				
3	25Y3/3 暗オリーブ褐色細砂(白色砂・小礫混)	3層				
3*	3に粗砂ブロックが混じったもの					
4	10YR7/4 ぶい黄褐色極細砂					
5	25Y3/3 暗オリーブ褐色シルト(植物遺体混)	4層				
6	75YS/1 灰色シルト(植物遺体混)	5層				
7	75Y4/1 灰色シルト					
8	25Y4/2 暗灰黄色シルト(白色小礫混)	6層		048 溝		
9	10Y4/1 灰色細砂(白色小礫混)					
10	75YR/1 黄褐色極細砂(白色小礫混)					
11	10YR8/6 黄褐色極細砂					
12	11に細灰色ブロックが混じったもの	7層				
13	5Y4/1 灰色粗砂					
14	25Y8/4 淡黄色粗砂					
15	75Y7/1 灰白色粗砂	8層				
16	10Y3/1 オリーブ褐色シルト(部分的に粗砂混、下層攪拌)	9層				
17	5GY7/1 明オリーブ灰色シルト	10層				
18	75YR/2 灰オリーブ色シルト	11層				
19	5Y5/2 オリーブ褐色シルト	12層				
20	75Y7/1 明緑灰色シルト	13層				
21	10Y3/1 オリーブ黒色細砂～極細砂	14層				
22	25GY6/1 オリーブ灰色細砂	15層				
23	25GY6/1 オリーブ灰色シルト	16層				
24	25GY6/1 オリーブ灰色極細砂(上部に粗砂混)	17層				
25	10Y3/1 オリーブ黒色シルト					
4区						
番号	土層	大別	細別	備考		
2	5Y5/2 灰オリーブ色細砂(白色粗砂混)	2層		溝込み		
3	25Y5/2 暗灰黄色細砂(白色粗砂混)					
4	5Y6/2 灰オリーブ色粗砂ブロックと、10YR7/4 ぶい黄褐色粗砂が混じる					

おおむね弥生時代前期であることを示す。竜華地区の調査で検出した、第8層に対応すると考えられる(センター2007a)。

**第10層** (図版5-5) 灰色の極細砂もしくはシルトで構成される地層。第10層は第10-1・10-2・10-3層の三つに細分できるが、基本的には一連の自然堆積層ととらえられる。第10-1層は、2区の中央から北半部ではシルトと細砂の互層で構成され、南半部では粗砂を主とした洪水砂となる。第10-2層は2区の中央部では粗砂を主とした洪水砂、それ以外はシルトで構成される。第10-3層は全域においてシルトで構成されている。このように第10層は、その堆積を起因させた流水作用が、下部から上部へと次第に強くなっていることがわかる。第10層からの出土遺物は無い。竜華地区の調査で検出した、第8b層に対応すると考えられる(センター2007a)。

**第11層** (図版5-5) やや灰色がかった黒色のシルトで構成される地層。第11層は古土壌で、層の上部は植物遺体を多く含むが、下部は黒色のシルトである。地層の特徴は2・3区において共通する。第11層は下層を攪拌した痕跡は確認できない。層の上面は地表面化しており、水浸かりの様相ではなかったとはいえ、この地層が人為的な開削行為により形成されたとは言いがたい。第11層からの出土遺物は無い。竜華地区の調査で検出した、第9層に対応すると考えられる(センター2007a)。

**第12層** (図版5-5) 緑灰色のシルトで構成される地層。自然堆積層と考えられる。2区の北側の微高地上では第12層はみられない。

**第13層** (図版5-5) 黒色のシルトで構成される地層。第13層は古土壌で第11層よりも黒色化しており、また第11層よりも多くの植物遺体を含んでいるが、下層を攪拌した痕跡は確認できない。第11層同様、地表面化しているものの、人為的な攪拌行為で形成された地層ではない。第13層からは、2区で縄文時代後期と想定される土器片と、時期不明の石器片が出土している。竜華地区の調査で検出した、第10層に対応すると考えられる(センター2007a)。

**第14層** (図版5-5・6) 灰色の極細砂もしくはシルトで構成される地層。自然堆積層である。2区の北側では、下層の第15・16層を侵食しており、このために微高地が形成されている。第14層からの出土遺物は無い。

**第15・16層** (図版5-5) オリーブ色のシルトで構成される地層。第15・16層とも自然堆積層と考えられる。各層からの出土遺物は無い。

**第17層** (図版5-5) 黒色のシルトで構成される地層。2区の南端と3区の南端で検出した。第17層は古土壌であるが、層の上部のみを検出したため、下層を攪拌しているか否かは不明である。

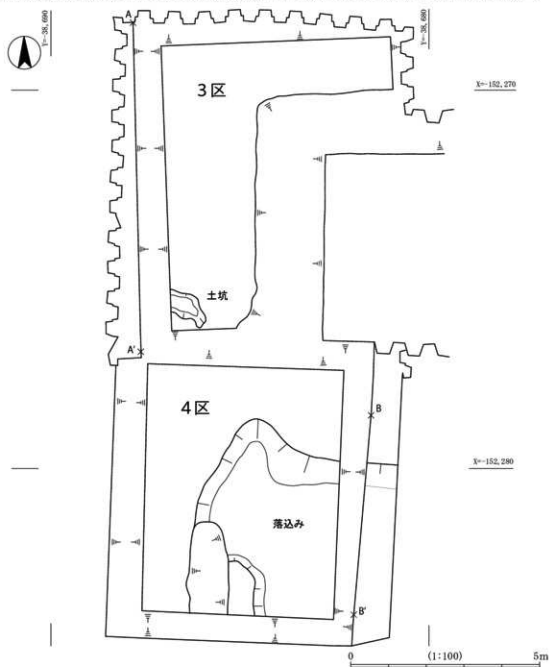
## 第5章 調査成果

今回の調査では第1層を除去した遺構検出面を第1面、第2層を除去した遺構検出面を第2面というように、除去した基本層序の該当番号を遺構検出面に付けた。

### 第1節 古代から中世の遺構面

#### (1) 第1面

第1層を除去した遺構検出面。めだった遺構は検出できなかった。第1層からの出土遺物は無い。



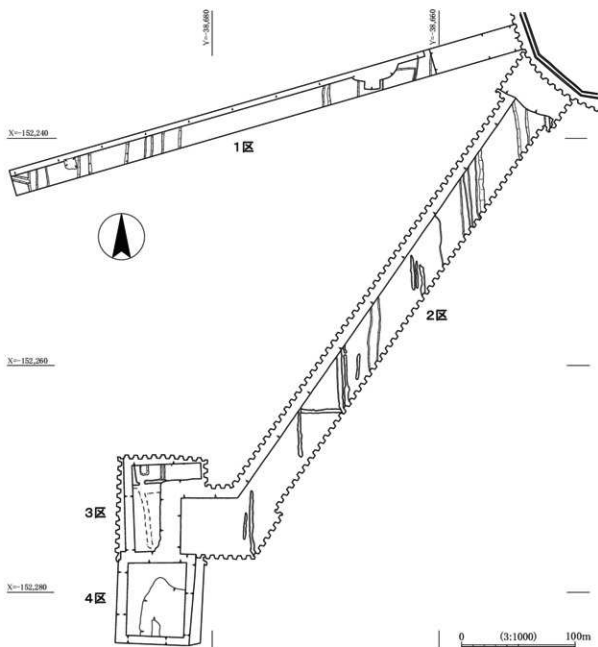
第9図 第2面遺構配置図



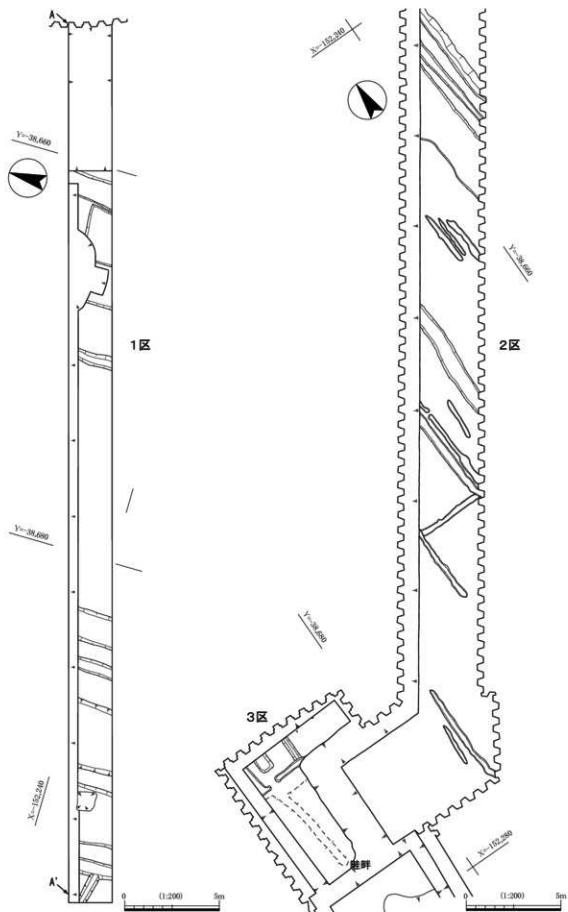
(2) 第2面 (第9図、図版1-3・4)

第2層を除去した遺構検出面。3区で土坑を、4区で落込みを検出した。いずれの遺構も埋土は第2層である。4区では第2層によって、第3層以下が攪拌されており、第2層を除去した時点で第8層の粗砂が確認された。なお1・2区ではめだった遺構は検出できなかった。また5区では、後世の攪乱のため1・2面以下の遺構検出面は残存していなかった。

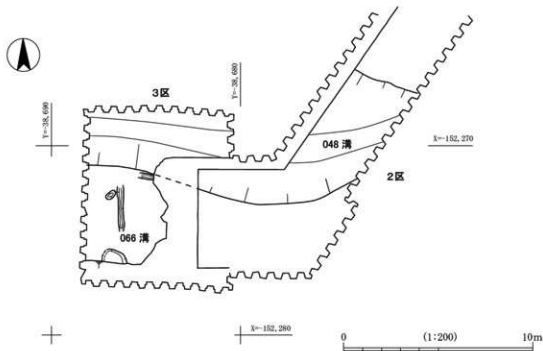
第2層からは1～3 (第20図) の土器が出土している。1は4区から出土した信楽焼の播鉢の底部片。8条1単位のすり目が、3単位確認できる。16世紀末以降のものと考えられる。2は4区から出土した、古式土師器の甕の口縁から体部にかけての破片。外面には斜め方向のハケ、内面には横方向のハケを施す。3は1区から出土した須恵器壺の底部片。奈良時代のものである。最も新しい遺物は1の播鉢で、第2層の形成時期は中世末と考えられる。



第10図 第3面全体図



第11图 1~3区第3面平面图



第12図 2・3区第5面平面図

(3) 第3面 (第10・11図、図版1-2・5、図版2-1・2)

第3層を除去した遺構検出面。1区では中央部を除くほぼ全域で、南北方向の溝群を検出した。2区でもほぼ全域で南北方向の溝群を検出し、調査区の中央やや南よりの地点で、東西方向の溝を1条検出した。3区では南北方向の溝と、東西方向の溝、水田畦畔を検出した。3区の水田畦畔は、上部が第1層により削平されていた。1・2区で検出された溝の埋土は、一様に灰色もしくは褐灰色の細砂でマンガ班の沈着がみられる。基本層序の第2層にあたる。また層中には白色の粗砂がわずかに混じっており、小規模な流水作用によりもたらされた粗砂を攪拌していることがわかる。これらの溝群は畝作により形成された畝間の溝と考えられ、調査区のほぼ全域に畝が広がっていたことがわかる。ただし、3区で水田畦畔の痕跡が検出されていることから、調査区の南端には水田が広がっていたと想定される。

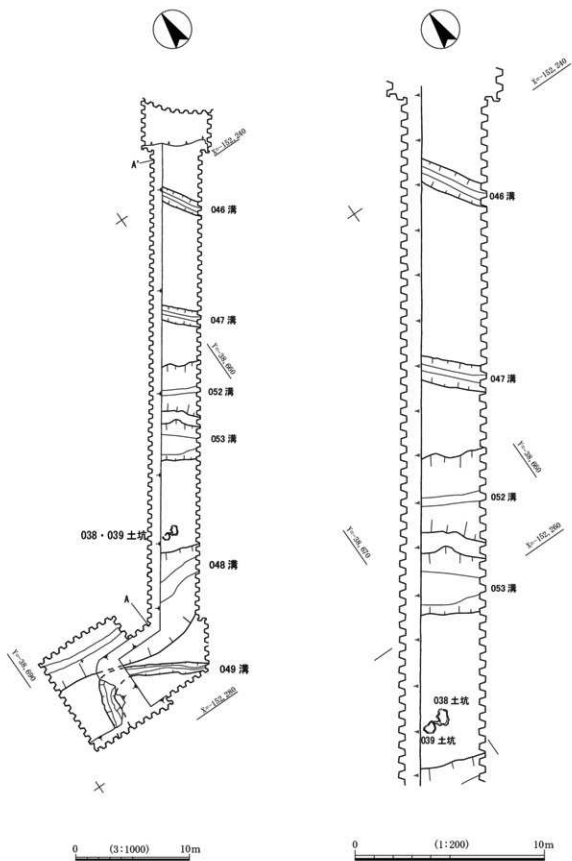
なお遺構および包含層から出土している土器は細片ばかりで、時期を決定できるものが無い。第3面は、上層の包含層出土遺物から類推する限り、古代以降で中世末以前と大まかにとらえることしかできない。なお1区では第3面より遡る遺構は皆無である。また6-3区では、第1層から第4層までの残存が確認できたが、めだった遺構は検出できなかった。

(4) 第4面

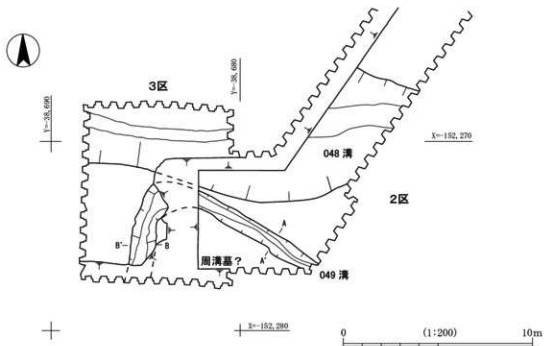
第4層を除去した遺構検出面。めだった遺構は検出できなかった。なお2区の第4層からは、4(第20図)が出土している。4は須恵器壺の頸部から胴部にかけての破片で奈良時代のものである。

(5) 第5面 (第12図)

第5層を除去した遺構検出面。2区と3区にまたがる048溝が機能していた段階を検出した。048溝内の埋土は灰色のシルトであるが、植物遺体の水平堆積がみられる上層(第8図6)と、植物遺体の無い下層(第8図7)に分かれる。上層でみられる植物遺体は、048溝に水が流れている状態で堆積したものと考えられる。埋土は上・下層ともに基本層序の第5層にあたる。



第13图 第6面全体图(左)·2区第6面平面图(右)



第14図 2・3区第6面平面図

048溝の南側では東西方向の溝1条と、南北方向の溝1条、土坑2基を検出した。埋土は灰色の極細砂で、基本層序の第5層にあたる。これらの遺構からの出土遺物は無い。

なお2区の第5層からは6（第20図）が出土している。6は古式土師器の有孔鉢で、古墳時代初頭のものである。

## 第2節 弥生時代末から古墳時代初頭の遺構面

### (1) 第6面（第13・14図、図版2-5、図版3-1・4）

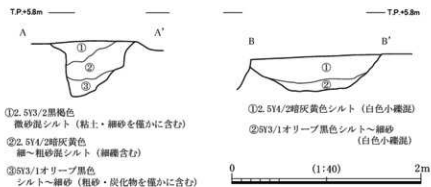
第6層を除去した遺構検出面。2区と3区の全域で遺構を検出した。

**046溝**（第5・13図、図版3-1） 2区の北側で検出した溝。東西正方位より、斜め約45°方向に振れる。2区の北側では、基盤層である第7・8層が北に向けて落ち込むが、046溝は落ち込みの肩からやや低い位置に掘削されている。溝の底は北西が高く、南東が低い。埋土は灰色の細砂で、基本層序の第6層にあたる。溝からの出土遺物は無い。

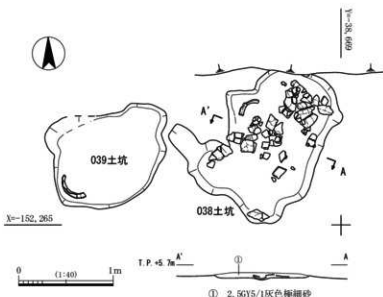
**047溝**（第5・13図、図版3-1） 2区の中央やや北よりの位置で検出した溝。046溝同様東西正方位より、斜め約45°方向に振れる。埋土は灰色の極細砂で、基本層序の第6層にあたる。046溝同様、溝の底は北西が高く、南東が低い。溝からの出土遺物は無い。

**052・053溝**（第5・13図、図版3-1） 2区の中央やや南で検出した溝。この2つの溝は、どちらも埋土の上層が黒色のシルトであること、下層が灰色の細砂であること、さらに052溝の南側上端と053溝の北側上端がほぼ平行すること、深さがほぼ同じであることから対であったと考えられる。おそらく溝と溝の間には堤が設けられていたが、後世の耕作行為で削平されたものと考えられる。両溝とも埋土は基本層序の第6層にあたる。どちらも溝の底は北西が高く、南東が低い。溝からの出土遺物は無い。

**048溝**（第5・8・13・14図、図版2-5、図版3-3・4） 2区と3区にまたがる溝。第5面の段



第15図 048溝断面図



第16図 038・039土坑平面・断面図

階でも引き続き機能しているが、開削は第6面の段階である。断面の観察から、048溝はちょうど第7・8層が落ち込み箇所、すなわち洪水砂で形成された微高地と低地の狭間に掘削されていることがわかる(第5図)。溝の埋土は上層が黄灰色のシルトで、下層は黒褐色の極細砂である。下層埋土は第7・8層を攪拌しているため、白色の粗砂を多く含む。上・下層ともに基本層序の第6層にあたる。上層埋土(第8図8)は中世の耕作土により削平されているが、地層の落ち込み方からみて、溝の南側で堤を形成していた可能性が想定できる。048溝は幅・深さともに他の溝よりも規模が大きく、また埋土の状況から、存続期間も他の溝よりも長いと考えられるため、周辺における基幹水路の役割を担っていたと考えられる。溝の底は西が高く、東が低い。また048溝と北側の溝群は平行せず、調査区を南東に出た箇所で見ると考えられる。上層埋土からの出土遺物は無いが、さらにその上層(基本層序の第5層対応層)から23(第21図、図版7)の土器が出土している。23は古式土師器の鉢で、内外面に斜め方向のミガキ痕跡がみられる。土器の時期は古墳時代初頭にあたるため、第5層の形成時に下層の第6層が攪拌されて混入したと考えられる。

下層埋土(第8図10)からは、13～16・18の土器が出土した(第21図)。13は古式土師器の小型壺。外面にはハケ目痕跡、底部付近の内面には指オサエ痕跡がみられる。口縁端部は刻み目を意識したのか、

焼成後に打ち欠かれた痕跡が確認できる。14も古式土師器の小型壺で、口縁は開ききみである。外面はハケ調整をおこなった後、ナデ調整を施しているが、底部付近にわずかにハケ目が残存する。内面は、胴部はナデ、口縁部付近はケズリ調整を施している。15は古式土師器もしくは弥生土器の壺で、頸部から胴部にかけての破片。外面には5条の櫛描直線紋と、同じく5条の櫛描波状紋を施している。内面は、頸部接合部付近は指オサエ、胴部はヘラケズリを施している。16は古式土師器の広口壺で、頸部から口縁までの破片である。口縁はやや外反する。外面は斜め方向のハケ調整、内面は横方向のハケ調整後、口縁部近くはナデ調整を施す。18は古式土師器の甕で、口縁部から頸部にかけての破片。わずかな痕跡であるが、外面口縁部付近に沈線が確認できる。内外面ともに摩滅が著しく、外面でわずかにタタキ痕跡が確認できるのみである。

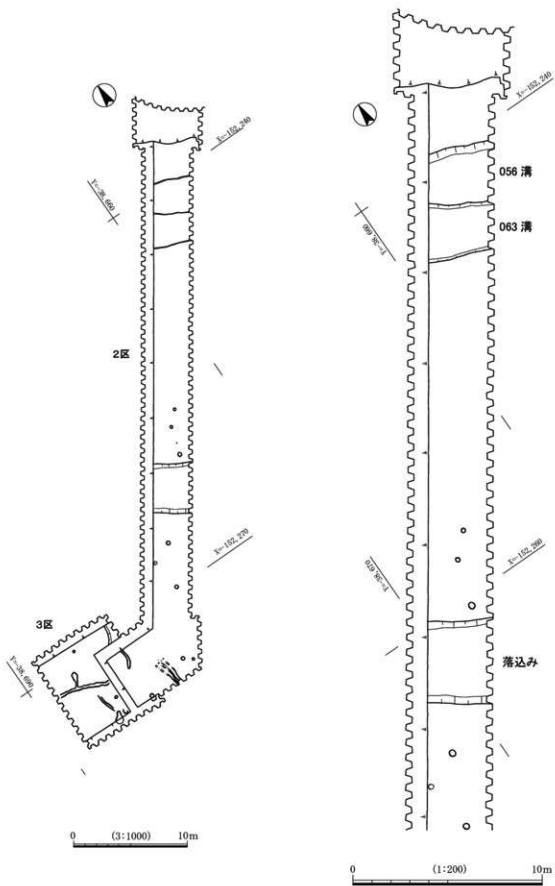
以上の土器はいずれも古墳時代初頭のもので、048溝開削の時点を示す資料といえる。

**049溝**(第14・15図、図版2-5、図版3-2・4) 2区と3区にまたがる溝。溝の埋土は2区で3層に、3区で2層に分かれる。いずれも基本層序の第6層にあたる。またどの層にも、下層の第7・8層に含まれる白色の粗砂が多く混じっている。2区の溝と3区の溝は、直接繋がる状況を確認できなかったが、3区の北端で溝が東に屈曲することから、双方の溝は繋がるものととらえた。埋土も2区における中層と下層、3区における上層と下層がほぼ対応することから(第15図)、両溝は同一の遺構ととらえられる。

2区側の溝からは17・20・22・24の土器が出土した(第21図、17・20は図版6)。17は古式土師器の広口壺で、口縁部から胴部にかけての破片。外面は摩滅のため調整は不明、内面はナデ調整、頸部やや下では指オサエが確認できる。20は古式土師器の甕で、口縁部から胴部にかけての破片。外面にはタタキ調整、内面にはケズリ調整を施している。22は古式土師器の鉢で、口縁部から胴部にかけての破片。頸部は23や24のような屈曲はせず、緩やかに開いている。内外面ともにミガキ調整を施している。24は古式土師器の鉢で、口縁部から胴部にかけての破片。頸部は明瞭に屈曲する。外面調整は摩滅のため不明、内面にはミガキ調整を施している。なお3区側の溝からも土器は出土しているが、すべて細片であった。

以上の出土資料から049溝は、古墳時代初頭に掘削されたと考えられる。また溝の形状から、今回調査した箇所は、方形周溝墓の北西角となる可能性もある。かりに方形周溝墓とするなら、048溝などの他の溝との先後関係が問題となってくる。しかし遺構自体の重複関係が無く、また出土土器においてもさほどの時期差が認められないため、他の溝との先後関係は不明といわざるを得ない。

**038・039土坑**(第13・16図、図版2-3・4) 2区の南側、048溝の北で検出した土坑。どちらも形状は不整形で、東西に並列している。どちらの土坑も埋土は灰色の極細砂で、基本層序の第6層にあたる。双方の土坑から土器が出土している(第21図、図版8)。19は039土坑から出土した古式土師器の甕で、口縁部から頸部にかけての破片。口縁部と頸部は歪んでおり、水平にならない。外面は摩滅のためわずかにナデ調整が確認できるのみ、内面は頸部下でケズリ調整を施している。21は038土坑から出土した古式土師器の甕で、底部から胴部にかけての破片。底部は平底である。底部・胴部ともに器壁はきわめて薄い。外面調整は摩滅のため不明、内面にはケズリ調整を施している。器形からみて外来系の土器か。



第17図 第9面全体図 (左)・2区第9面平面図 (右)



### 第3節 弥生時代後期の遺構面

#### (1) 第7面

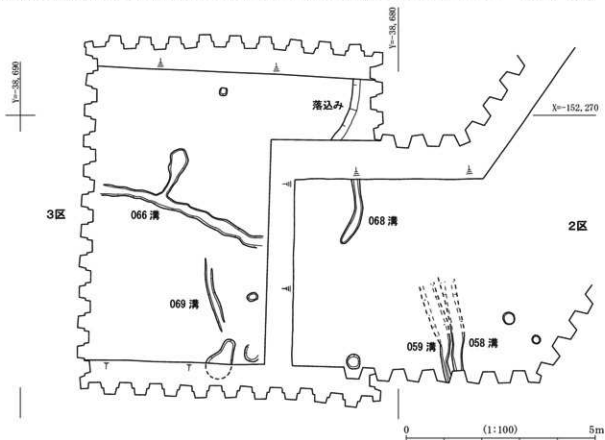
第7層と第8層はどちらも洪水堆積層で、堆積単位の差から2層に分けている。そのため第7層を除去した面には遺構はみとめられなかった。なお2区の第7層から7・9（第20図、9は図版7）の土器が出土している。7は弥生時代後期の壺の底部片である。9は弥生時代後期の短頸壺の口縁部から頸部片。頸部下にはわずかにハケ目が残存する。

#### (2) 第8面

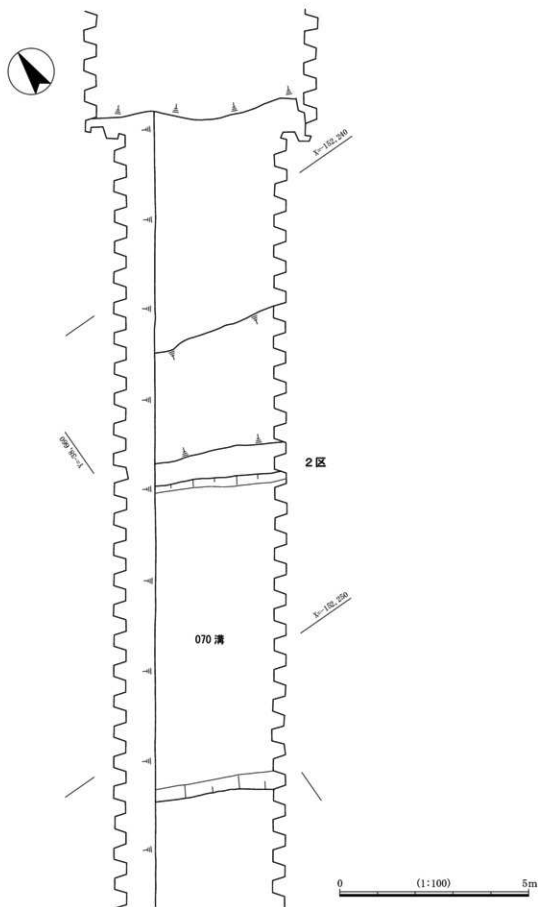
第8層を除去した遺構検出面。後述する弥生時代前期の遺物包含層、第9層の上面である。上層の第8層は洪水砂である。そのため、上面遺構が攪拌されず残っていると想定されたが、めだった遺構は確認できなかった。

2区の第8層からは5（図版7）・8（図版8）の土器が、3区の第8層からは12の土器が出土している。5は弥生時代後期の高坏で、口縁から腰部までの破片。内外面ともにナデ調整を施している。8は弥生時代後期の小型鉢である。外面にはナデ調整を施しているが、調整が粗く接合痕跡が残る。内面もナデ調整を施しているが、やはり調整が粗く指頭圧痕が残っている。12は弥生後期の広口壺で、口縁部の破片。口縁は垂下している。外面には縦方向のミガキ調整を施し、内面には口縁部付近にわずかにハケ目が残る。

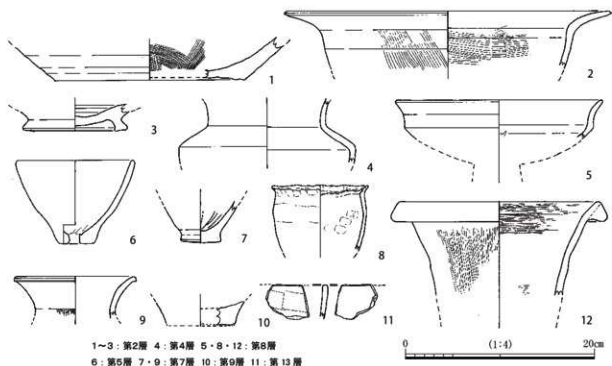
以上のように第7・8層から出土した土器は、いずれも弥生時代後期のもので、この二つの地層が同時期の洪水砂により形成されたことがわかる。同様の状況は既往の調査（センター2003a・2004・



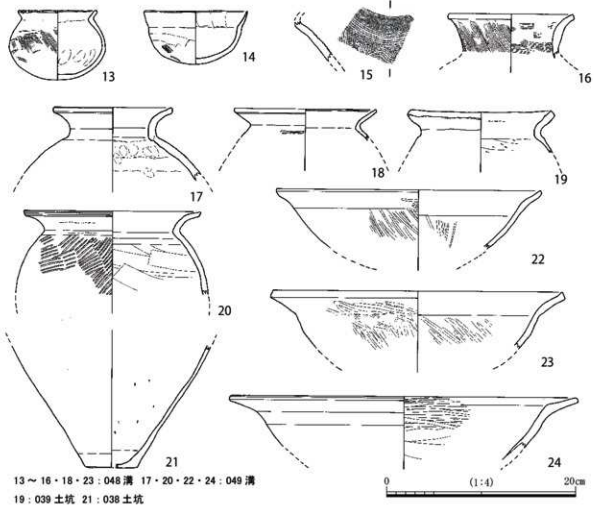
第18図 2・3区第9面平面図



第19图 2区第13面平面图



第20圖 包含層出土土器



第21圖 遺構出土土器

2007a)でも確認されており、久宝寺遺跡周辺に弥生時代後期の大規模な河道が通っていたことがわかる。この河道は、おそらく長瀬川の旧流路と考えられ、現在確認できる長瀬川の流路よりも西に偏っていたといえる。

## 第4節 弥生時代前期の遺構面

### (1) 第9面(第17・18図、図版4-2~5、図版5-1)

第9層を除去した遺構検出面。2区の北側で溝、南側で落込みと複数の土坑・溝、3区で溝と土坑を検出した。

**056・063溝**(第5図、第17図、図版4-3) 2区の北側では056溝と063溝を検出した。056溝の埋土は3層に分かれ、下層は黒色のシルト、中層は灰色の粗砂、上層は灰色のシルトに黒色のシルトブロック土が混ざる。中層の粗砂はこの溝が機能していた段階の流水堆積である。上層の黒色シルトブロックは基本層序の第9層にあたることから、第9層の形成段階で056溝は人為的に埋め戻されたと考えられる。また056溝は、063溝が埋没してから掘削されている。063溝の埋土は上中下層いずれもシルトもしくは細砂で構成されるもので、人為的な埋戻作業に伴うブロック土が認められない。したがって自然な堆積環境下で063溝が埋まった後に、056溝が開削されたと考えられる。056・063溝からの出土遺物は無い。

**落込み**(第5図、第17図、図版4-4) 2区の南側で落込みを検出した。落込み内の埋土は基本層序の第9層である。この落込みは、下層の第10-1層の凹みに沿うかたちで形成されている。そもそも第10-1層の凹みは、第10-2層中の粗砂(第5図30)が形成したレンズ状の堆積の高低差により形成されたものである。したがってこの落込みは、自然地形の可能性が高い。

落込みの周辺では、小規模な土坑を複数検出した。なお落込みおよび土坑からの出土遺物は無い。

**058・059・066・068・069溝**(第18図、図版4) 2区の南端と3区で複数の溝を検出した。058・059・068・069溝の埋土はすべて灰色のシルトで、基本層序の第9層にあたる。一方066溝の埋土は、灰色シルトのブロックと、灰色極細砂のブロックで構成される。これらは第9層と第10-1層のブロックで、066溝もさきの056溝同様、第9層形成時に人為的に埋め戻されたことを示す。これらの溝の周辺で小規模な土坑複数と、落込みを検出した。なお以上の遺構からの出土遺物は無い。

3区の第9層からは10(第20図)の土器が出土している。10は弥生時代前期の壺、もしくは甕の底部片である。摩滅のため内外面の調整は不明である。第9層および第9面の遺構からは、上記の土器1点が出土しているに過ぎないが、出土資料を積極的に評価すれば、第9面の遺構は弥生時代前期のものと考えられる。

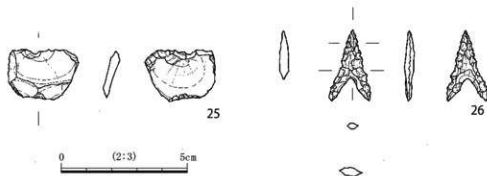
## 第5節 縄紋時代相当の遺構面

### (1) 第10面

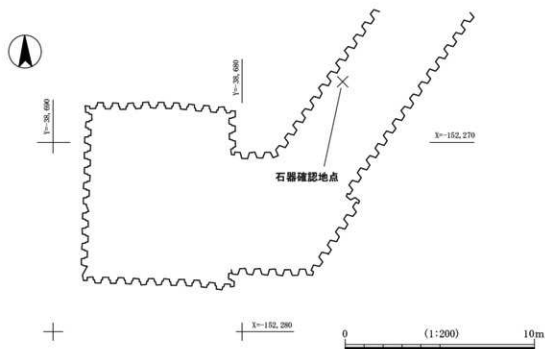
第10面では、めだつた遺構は検出できなかったが、3区の南端で鳥類もしくは両生類のものと思われる足跡を検出した(図版5-2)。第10面は湿地状の環境下にあったと考えられる。

### (2) 第11・12面(図版5-3)

第11・12面では、めだつた遺構は検出できなかった。



第22図 第13～17層出土石器



第23図 最終掘削面石器確認地点

(3) 第13面（第19図、図版5-4）

第13層を除去した遺構検出面。2区の北側で070溝（第5図、第19図）を検出した。070溝の埋土は黒色のシルトで基本層序の第13層にあたる。下層の第14層以下の自然堆積を切り込む形で掘削されており、人為的な遺構の可能性が考えられる。溝からの出土遺物は無い。

2区の第13層からは、11（第20図、図版7）の土器と25（第22図）の石器が出土している。11の土器は器種は不明であるが、縄紋時代後期にあたると思われる。25の石器は下半部が欠損しているが、側縁部には微細な剥離がみられる。時期は不詳である。

(4) 第14～16面

第14～16面では、遺構は検出できなかった。なお2区の調査終了段階において、最終掘削面上で26（第22図、図版8）の石器を確認採取した（第23図）。26は凹基無茎鏃で、縄紋時代前半期にまで遡らせる形態である。出土層位については明確にできなかったが、第17層中に含まれていた可能性が考えられる。そうであるならば、第17層は当該期の古土壌と考えられる。

## 第6章 まとめ

以下で今回の調査成果を時期ごとにまとめる。

**中世** 中世前半の段階の遺構は、時期決定のできる出土遺物が無いものの、第3面で検出した南北方向の溝群がこれにあたると思われる。この段階では調査地の大部分は畠となっており、南端には水田が展開していた。以上のように中世段階では、調査地周辺は耕作域であったと考えられる。

**古代** 古代と時期を特定できる遺構は確認できなかった。ただし第4層から出土した須恵器壺片を、時期決定に援用するなら、第4層もしくは第5層の形成時期が古代にあたると思われる。ここでは第5面の段階における、048溝の機能時点を古代に想定しておきたい。

**古墳時代初頭** 古墳時代初頭の遺構は第6面の溝群である。なかでも2区と3区にまたがる048溝はその深度と幅から、当地における基幹水路の役割を果たしたと考えられる。中世以降の耕作土(第1・2層)の削平を受けてはいるが、溝の南側には堤を伴っていたと考えられる。これより北の溝は、048溝に結合する可能性が考えられる。一点留意しておきたいのは、2区で検出された溝群が延伸するなら、1区でも検出されるはずであるが、1区では同時期の溝がまったく検出されていないことである。想定される様相としては、1区と2区の間で途絶える可能性、溝群が方形ないしは円形に接続する可能性、1区と2区の間を南西から北東に流れる流路があり、すべての溝がそこから派生している可能性などがあげられる。また2区と3区にまたがる049溝については、方形周溝墓の可能性あることを指摘した。検出面積が少ないため、積極的な断言は避けるが、調査区の南半部が墓域であった時期も想定される。

**弥生時代前期** 弥生時代前期の遺構面では、溝と土坑群を検出し、久宝寺遺跡における本格的な開発の開始がこの時期に遡るといえる。これまでの調査見解(センター2003a・2004・2007a)を裏付ける結果が得られた。ただし以下の点には留意すべきである。今回の調査地よりも南側の調査では、これまで弥生時代前期から、古墳時代初頭までの間の遺構面が複数検出されている。それは竜華地区の調査でいうところの第6面(弥生時代後期)と第7面(弥生時代後期)で、弥生後期の洪水砂層の直下で検出されている(センター2007a)。しかし今回の調査では、弥生時代後期の洪水砂層である第7・8層の直下で検出されたのは弥生時代前期の遺物包含層であった。弥生時代前期から、後期までの間の包含層が確認できていないのである。当地が流路の中心地にあたり、弥生時代後期の地表面が削平された可能性を想定しておきたい。

**縄紋時代** 縄紋時代の遺構は、第13面の070溝がこれにあたるだろう。遺構からの出土遺物は無いが、第13層中出土の土器と石器から縄紋時代後期の遺構と考えられる。なお推定第17層から縄紋時代前半期と考えられる石鏃を確認しているが、同時期の遺構の様相は不明である。

## 参考文献

足利健亮1970『日本古代地理研究』大明堂

阪田育功1997「河内平野低地部における河川流路の変遷」『河内古文化研究論集』柏原市古文化研究会

財団法人大阪府文化財センター 2003a「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書」V 財団法人大阪府文化財センター調査報告書第103集

財団法人大阪府文化財センター 2003b「新上小阪遺跡」財団法人大阪府文化財センター調査報告書第94集

財団法人大阪府文化財センター 2004「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書」VI 財団法人大阪府文化財センター調査報告書第118集

財団法人大阪府文化財センター 2007a「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書」VII 財団法人大阪府文化財センター調査報告書第156集

財団法人大阪府文化財センター 2007b「植松遺跡」財団法人大阪府文化財センター調査報告書第164集





圖 版





1 調査前風景 (北から)



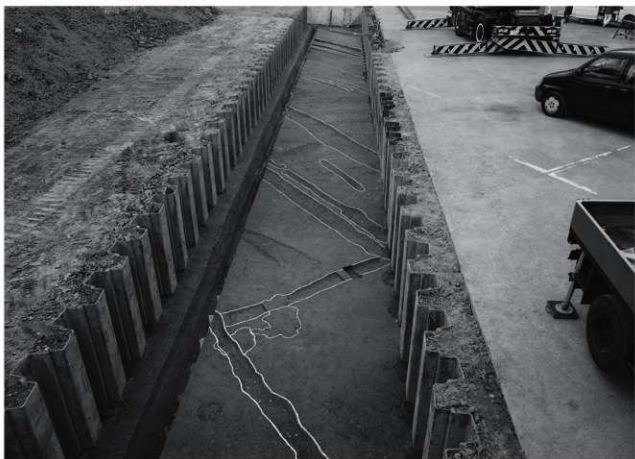
2 1区第3面全景 (南東から)



3 4区第2面全景 (北から)



4 3区第3面全景 (東から)



5 2区第3面全景 (南東から)

図版2 遺構



1 2区第3面遺構検出状況 (南東から)



2 2区第3面遺構完掘状況 (南東から)



3 038・039土坑検出状況 (東から)



4 038土坑土器検出状況 (東から)



5 3区第5・6面全景 (東から)



1 2区第6面全景 (北から)



2 2区049溝断面 (北西から)



3 3区048溝断面 (東から)



4 2区南端第6面 (北東から、手前が048溝、奥が049溝)

図版 4 遺構



1 2区南端第8層堆積状況(東から)



2 2区南端第9面(東から)



3 第9面056溝(手前)、063溝(奥)(北から)



4 2区第9面(南西から)



5 3区第9面全景(南東から)



1 056 溝断面 (東から)



2 3区第10面検出足跡群 (北東から)



3 3区第12面平面・断面 (北東から)



4 3区第13面平面・断面 (南西から)



5 3区第10層から第17層 (北東から)



6 2区第14層の自然河道 (南東から)



7 6-3区全景 (東から)



8 6-3区断面 (西から) 2



17



20





12



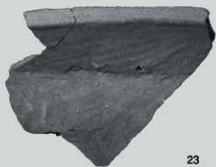
18



5



11



23



9

図版8 出土遺物（土器・石器）



8



13



14



15



16



19



21



26

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	きゅうほうじいせき							
書名	久宝寺遺跡							
副書名	寝屋川流域下水道中央南増補幹線（一）人孔築造工事に伴う久宝寺遺跡発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	財団法人 大阪府文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第203集							
編著者名	奥村茂輝							
編集機関	財団法人 大阪府文化財センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁目番4号 ℡072(299)8791							
発行年月日	2010/6/30							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
久宝寺遺跡	大阪府堺市西久宝寺	27212	23	34° 37° 38°	135° 34° 42°	2008年11月4日～ 2009年7月6日  2010年1月4日～ 2010年3月10日	415㎡  74㎡	寝屋川流域下水道中央南増補幹線（一）人孔築造工事
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
久宝寺遺跡	集落	古墳時代	溝・土坑	古式土師器			古墳時代初頭の溝・水路を検出	
	集落	弥生時代	溝・土坑	弥生土器・石器			弥生時代前期の溝・土坑を検出	
要約	久宝寺遺跡		今回の調査では、中世、古墳時代初頭、弥生時代前期の遺構面等を確認した。これらのうち、古墳時代初頭期の遺構面では、基幹水路と奥溝墓と想定される溝を検出した。当該期の調査地付近では、集落域と墓域が混在していた可能性が高いと判断できる。また弥生時代前期の遺構面では、溝と土坑を検出した。久宝寺遺跡における本格的な開発開始時期が、弥生時代前期にあたることを示す調査成果である。					

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第203集

八尾市

## 久宝寺遺跡

寝屋川流域下水道中央南増補幹線(一)人孔築造工事外に伴う  
久宝寺遺跡発掘調査報告書

発行年月日 / 2010年6月30日

編集・発行 / 財団法人 大阪府文化財センター  
大阪府堺市南区竹城台3丁目21番4号

印刷・製本 / 株式会社 明新社  
奈良県奈良市南京終町3丁目464番地